

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可  
平成21年10月1日発行（毎月一回一日発行）  
俳句雑誌 沖 第40巻第10号



俳句雑誌[おき]

10  
月号

沖  
発行所

# 川筋気質

能村 研三

軍艦のやうな靴よと雲の峰

幾年を土着と言ふか鱚雲

下読みの唇うごく秋灯

里の名と同じ苗字や赤のまま

## 北九州文学館

八月の終りに、北九州で「沖」九州大会が開かれた。今回は私の希望で、句会場は小倉の北九州市文学館で、翌日の吟行は八幡西区にある木屋瀬宿を歩いた。

北九州市には、杉田久女や橋本多佳子、横山白虹などゆかりの俳人が多くいたので「俳句のまち」として、俳句大会の誘致に積極的であった。「沖」でも、この協力を得て平成七年に勉強会を、その後も九州大会などを開催させていただいた。

北九州文学館には、仕事の関係で二年前に議員視察の随行としてはじめて訪ねて以来、その運営方法や市川との縁が深いことなどから何度か訪問し親しくさせて頂いていた。この文学館は、元々北九州の歴史博物館の跡をリニューアルして開館したもので、館長は門司区在住のノンフィクション作家、佐木隆三氏。私たちが句会を行った日は、館長さんもおられてお会いする機会を得た。お話をしていくうちに、佐木さんは、一九七三年から一年半市川市川南に住まわれたことがあり、市川市とのご縁も深く、そんなことか

生真面目な案山子が故に侮られ  
字配りを試し書きして秋澄めり

マスターキー次々開けし夕野分

北九州・木屋瀬宿

爽涼や川に抜けぬる通し土間

木屋の瀬は川筋気質野分立つ

秋風や矢止め家並みの宿場町

らも身近に感じられた。

北九州は古くから様々な文学者を世に送り出してきたところで、独立した記念館がある松本清張の他、森鷗外、火野葦平そして晩年を市川で暮らした宗左近など、それぞれすばらしい人たちが輩出されている。

今回の九州大会では、句会の終了後に文学館の副館長の今川英子さんに「北九州の文学について」と題して講演していただいた。

今川さんは、かつて市川市内の女子短大で教鞭をとられた方で、林芙美子の研究者としても知られており、現在文学館建設に向けたアドバイスのために年に何度か市に来ていただいている。

今、役所での私の最後の仕事として市川に文学館開設に取り組んでいるが、文学館というとうとうしても、生原稿など紙ベースの展示が多くなって専門的になってしまいがちだが、だれにでも親しまれるような文学館が出来ればと思っている。



# 蒼茫集



埃<sup>エジプト</sup>及行

北川英子

日食

上谷昌憲

明易のコーランに醒め埃及なり  
立秋の没日真つ赤やピラミッド  
灼け砂を行けど行けども紀元前  
列柱の間よりなんと盆満月  
悠久のナイルの水音納涼船  
ラマダンに似て断食の水あたり

曖昧に過ぐる日食かたつむり  
噴水の使ひ回しの水真白  
ビルにまだ灰かな赤み花火待つ  
来年は廃校となる蟬時雨  
夏了る敵の校歌のながながと  
大声が取得の補欠雲の峰

目まとひ

大畑善昭

明

日

辻美奈子

目まとひは森の門番敏く来る  
斑猫の黄泉路にもみてくれさうな  
懐紙一枚炎暑に燃せば黄のほむら  
古文書の読めぬ崩し字にいにい蟬  
手押しポンプより炎昼へ水の束  
短夜の夢へ見えざる扉を閉ざす

明日にまた明日畦豆の実入りよき  
噴水に絢爛の水ありにけり  
生きてゐるひとに物音夜の秋  
土用芽の出でカーテンの丸洗ひ  
夏果の一輪挿しの莖より根  
人形を洗うてをれば日雷

暑中見舞

森岡 正作

骨董市戦後のやうに灼けてをり  
読経の後かなかなの鳴き継げり  
極太の一筆暑中見舞くる  
心太黙つてばかりもぬられまい  
かつかつと西日を下駄で刻み来る  
蚊を打つて甲斐に一步を印しけり

肩すかし

千田 百里

お台場二句  
晩夏光積木のやうなTVビル  
火取虫めくや台場の夜を巡り  
日食の肩すかし昼寝でもするか  
秋蟬の砦やいくさ終へし日も  
佳境てふしづけさ流灯会の岸辺  
霧の中走り抜けしは疾き霧

陸の錨

荒井千佐代

波立ちて湾に潮差す茅花かな  
梅雨ひでり雑魚に諍ふ鳶・かもめ

鏝厚き陸の錨や夏の蝶  
野牡丹や気休めほどの木戸の鍵  
かのこ百合家族それぞれ傷を持ち  
うぶすなの夏野の端の葬かな  
二人居 千田 敬

竹夫人詠めど添ひ寝の覚えなし  
乾したきは詩の毒すこし濃き冷酒  
二人居の黙も会話よ貝風鈴  
遠く坐しテレビ操る終戦日  
丹の鉄橋渡れば秋の待ちをらむ  
根曲りの梁の太さや今朝の秋

四千万歩

秋葉雅治

町衆を統べて鉾稚児高く座す  
燃え盛る窯の心音夜の秋  
かなかなや遠き落日負ふ大樹  
滾つ瀬に合はず靴音盆帰省  
素風背（濡）に四千万歩の男発つ  
ベルトサイン消え天空の新走

廊涼し 遠藤真砂明

夏波の崩るる胸のすく高さ  
潮鳴りに雄松林の真炎天  
己が吐く息にもむせて油照り  
白桃に刃を入れて子をときめかす  
通し新潟市家徳の館 榊一本杉の廊涼し  
夏雲のずしりと安吾眠る町

手の湿り 渡辺輝子

振込みのタッチをうかと油照り  
脱水の振動暑さいや増せり  
講義半ばに忍び扇を使ひたり  
原爆忌時報に合はず手の湿り  
病む人に頑張るなよと貝風鈴  
涼新たクツキーに振る粉砂糖

蟬しぐれ 高橋あさの

花火果て濶の川幅ありにけり  
かなかなかな糸口探しゐるやうな

返せざる机上の一書夜の秋  
涼しさや弥陀本堂に目つむりて  
忠敬像の旅立つ一步さはやかに  
刻名の力士たどるや蟬しぐれ

心 太 松本圭司

許すとは許されること心太  
真つ白な雲を翼に夏去れり  
去る者は追はないといふはた神  
消火器の使はぬ赤さ秋に入る  
年取りてこそ言へること雁来紅  
原爆忌名刺の角が手をつつく

山 雨 辻 直美

時鳥山雨を裂いて涉りけり  
夏炉焚くいま日蝕のコロナの火  
一人暮らせばひとりに噎ぶ心太  
たなごころとは白桃を愛づる位置  
帰省子に壮年の翳きざすなり  
場違ひな身を覆ひたる砂日傘

日食 藤原照子

日食の昏みの這へり青田原  
登山帽四つ足となり岩場攀づ  
灯取虫飯いひで封する旅便り  
ちちははに修羅のひとこゝろ鳳仙花  
土用干弊衣破帽の君に遇ふ  
睡蓮の余白探して亀の首

月下美人 菅谷たけし

風にまだ慣れず弓なす今年竹  
黒揚羽校庭の砂乾きぬし  
月下美人と寝惜しみのブランデー  
藺座布団大役置いてゆかれけり  
鯖を追ひ来し船番の北なまり  
朝ぼらけ帰港の鯖火群れを解く

昼の月 松井志津子

背泳ぎはさすらふに似て昼の月  
白南風や高鳴るマスト沖が待つ  
昆布干す無垢の風紋散らしては  
握りしめるためのハンカチ齒科通ひ  
葱剥いて紙の音する夏の果  
新涼や沈めて白き皿小鉢

日食 松井のぶ

皆既日食悪石島の夏の乱  
さはやかな影とつながる僧衣かな  
若者てふ牛に曳かれしキャンプ村  
いい旅の新涼杉の木立より  
花野行ますらをぶりの尾根づたひ  
幼らが帰り秋風すんと来

小さきもの 楠原幹子

炎天や耳鳴りだけの無音界  
三伏の馬鹿になりたる蝶番  
夕映えの湾に一舟風死せり  
涼しさや懐紙に透くる青海波  
返事ありて待たされてをり百日紅  
向日葵や小さきものは低く干し

吉野杉箸 樋口英子

初蟬の鳴きて仰がる木となれり  
四肢ばねとなり神輿昇く若さかな  
草苗や鳴るまで牧の木にもたれ  
空使ひ切つて花火の果てにけり  
踊上手と先頭に立たされし  
冷奴吉野杉箸かをりけり

# 潮鳴集



今日から

古屋

元

椅子に掛けし夏服たちの会議かな  
新宿の夜にまぎれし登山帽  
マネキンの家族今日から海水着  
千代田区の御苑に拝す青田風  
書出しを決めかねてをり蝸牛

バーコード

林昭太郎

薄暑かな朱肉に残る印の跡  
けふ夏至の水道水の無味無臭  
入口がやがては出口蚩籠  
臨海都市予定地といふ草いきれ  
バーコードいつしよに冷えて冷し瓜

火涼し

甲州千草

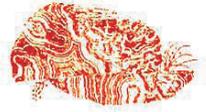
水槽の酸素忙しき朝曇  
改札で子を受け取りぬ夏休み  
零す汗噴く汗最古の鉄橋に  
魚網涼しく据うる深川飯処  
火涼し回して魚の串を抜く

銀の雨

柴田近江

日蝕に沸く島ゆるはたた神  
鋸目立日がな緑蔭軋ませて  
一揆太鼓打つや峰雲揺らぐまで  
銀の雨脚つかむ夏蕨  
地軸ややゆがみてをりぬ昼寢覚

# 沖作品



## 能村研三選

炎昼を徒にて知りぬ己が罪

長崎

柿本 麗子

昭和の世生きて来しかに大海月

爽竹桃少しの毒は誰も持つ

透けるもの侘しく見ゆる晩夏なり

一人歩きしたき汀や晩夏光

山月の翳り火蛾舞ふ隠れ宿

日蝕の薄闇に聞く梅雨鴉

夕虹の縁まで母の車椅子

この風に千羽鶴飛べ広島忌

涼新た夕日曳きくる白帆かな

黒白の南風の境にカーフェリー

暗渠より水をどり噴く梅雨出水

苛立ちの募る影かな大西日

甘藷を植う畝に散水力水

点描の漁火涼し七つ島

愛知

近藤 敏子

千葉

鈴木伸一

暁の人の音せぬ蓮あかり

早星唐三彩の駱駝こぶ

ひとの世にかく長居して浮人形

髭剃つて爪伸びてゐる我鬼忌かな

星今宵ワインに泛ぶコルク片

海峡の町子午線に水打てり

蜘蛛の囿に蜘蛛囚はれてゐる如し

暁光を受信中なり蓮の花

亀兎同じ速さや走馬灯

よき名ありよき音のあり大花火

願ひごとみんなひらがな星祭

日盛の街に出て行く義理もよし

花石榴燃えて明日は村でなく

百態の水の字涼し草書展

峰雲や運河名残りの赤き橋

市川市

鳥居 秀雄

東京

七種 年男

藤原はる美

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

夾竹桃少しの毒は誰も持つ 柿本 麗子

柿本さんは敬虔なクリスチャンだそうだが、クリスト教には原罪意識がある。クリスト教の教えによれば、人間は「エデンの園」を開放された、生まれながらの原罪を背負っている。この原罪から解放される為には、神に敬虔な祈りを捧げなければならぬ。原罪すなわち人間は、だれもが毒を持ち備えているのである。それぞれ人間関係によって強く出る場合とそうでない場合があるようだが、どんな善良な人でも、自分は無毒な人間と思っても少なからずの毒を持っているのである。夾竹桃は公害にも強く、道路脇や工場などにも植えられ、枝を切ると白い乳液が出るが強い毒性があると言われている。

この風に千羽鶴飛べ広島忌 近藤 敏子

千羽鶴が平和のシンボルとなったのは、原爆投下から十年後である。広島で被爆した小学生の少女が「千羽鶴を折れば、願いが届く」と祈りながら鶴を折り始めたが、願ひむなく原爆症で亡くなった。現在でも世界中から送られてくる千羽鶴が広島平和記念公園にある原爆の子の像の周りに手向けられている。「この風に千羽鶴飛べ」作者の強い表現は、二度とこのような悲惨なことにならないようにとの思いがこめられている。

黒白の南風の境にカーフェリー 鈴木 伸一

黒南風は梅雨どきの黒く重い雨雲のもとで吹く風で、白南風は梅雨明けに吹くものを言う。この風の名は山陰、九州、薩南諸島あたりで、元来は漁師の言葉であったようだ。黒から白へ風の色が変わるといふ感覚には、生活に根差した季節感が息づいているようにも思う。白南風と黒南風というのは晴れるのが白南風、くもったり雨が降ったりするのが黒南風とも言われるが、大きな大洋を行くカーフェリーは、天候の微妙なところを行き来する。

早星 唐三彩の駱駝 こぶ 鳥居 秀雄

唐三彩は唐代の芸術品で、千年以上の歴史があり、陶器の上の釉薬の色を言い、クリーム色・緑・白の三色の組み合わせ、或いは緑・赤褐色・藍の三色の組み合わせを主としていることから三彩と呼ばれる。唐三彩の動物の俑としては、馬と駱駝が代表的で、その造形は当時の社会や風俗を表しており、力強く肥えた馬や駱駝の像は、唐の国力が強盛であったことを示すものであった。かつての長安は国際都市であったため、流沙を越えてきた多くの駱駝が見られたという。(以下略)